

の一根蘭ヒトモトを採て、鬪鶏國造に與へられしを始とし日本紀これに歌によりて秋の七種の數に入しハ、山上憶良を始とし萬葉集それを字音にてらにと唱へしハ紫式部を始とす源氏物語凡西土にてハ宋以降ハ蘭花を尊みて右の蘭とせしより、此蘭世に隠れて絶て去るものなかりしを、明に至り時珍の本草綱目を撰びし時、離騷辨證訂蘭說等によりて、さらに蘭花を以て別種とし、此蘭を以て古の蘭とせしハ信すべし、されど我朝にてハさせる混同もなく、允恭天皇の比より今に至りて、蘭のふぢばかまなるハ、實に人心の正直仰ぐべく尊むべし。○中略

釋名

ふぢばかま日本紀萬葉東雅云、ふぢばかまいふ義詳ならず、其花淡紫色、此に藤といふ色に似て、其瓣の筋をなせしが、袴に似たる所あれバ、なを俗に藁とす、藤袴とはいひしなるべし、らに

源氏物語、らには蘭易素問禮記家語左傳說文開寶本草葉似馬蘭詩經陸機疏云鄭俗三月蘭蘭故名蘭草また陸機の説上文にみへたり蘭蘭詩經陸機疏云鄭俗三月蘭蘭故名蘭草また陸機の説上文にみへたり蘭蘭詩經陸機疏云鄭俗三月

除蓋蘭以蘭之蘭蘭義蘭に同じ香蘭琴操此蘭芳香王者香同國香左傳蘭品云典籍便

一名之蘭秋蘭離騷文選云蘭澤類本草引唐本草拾遺云蘭草五大澤蘭本艸綱目引地

に似て其葉大なり、故幽蘭離騷思玄賦幽蘭賦楚辭九章云蘭茝幽而獨芳また曹子建七燕尾

香同上馬志云其葉紫菊菊譜正名馬孩兒菊同故有孩兒菊之名也又引訂蘭說古之蘭草即今

之俗名孩待女花格致鏡原引採蘭雜志昭代叢書引蘭言淮南子云男子樹

〔大和本草八〕真蘭和名フヂバカマ、又アラ、ギトモ云古歌ニラニトモヨメリ、八雲抄ニモ蘭

ヲフチバカマラニト云ト書玉フ、葉ハ麻ニ似テ兩岐アリ香ヨシ、ホシテ彌カウバシ、是真蘭也、野

ニアリ、秋紫白花ヲ開ク、古歌ニフチバカマヲ多クヨメリ、國信ノ歌ニ秋ノ野ニムラク立ル蘭

ムラサキ深ク誰カ染ケン、若葉ハユビキテ食スベシ、其芳香美味、凡菜ニスグレタリ、試ニ食シテ

其香味ヲ知ベシ、嫩葉ヲ採テ佩之ト云ヘリ、其性亦好、詩經楚詞ナドニ詠ゼシ蘭是ナリ、上代ハ沈